

東南アジアにおける民族服の研究 (第3報)

タイ国メオ族の民族服飾

柴村恵子・望月照子

Studies on Folk Costumes of Northeast Asia (III)

Folk Costumes of Meo in Thailand

K. SHIBAMURA and T. MOCHIZUKI

緒言

東南アジアの大陸部には、伝統文化を異にする幾種類もの少数民族が入り交って分布している。特に、中国南部及び西南部からインドシナに至る地域は最近まで政府の監督の及ばない一種の政治的空白域であった。そこには少数民族独自の生活圏が保たれ、様々な生活が営まれてきた。このことは中国の文献記録の中にも古くからいろいろな名称で記されている。著者らは第1報において「タイ国山地民族の生活と衣裳」、第II報で「タイ国アカ族の民族服飾」について報告したが、今回はメオ族について調査研究を行った。メオ族は歴史が古く、紀元前3世紀頃には揚子江南部の洞庭湖から鄱陽湖にかけて住んでいたが、その後、西へ移動し湖南省から雲南省、貴州省、ベトナム、ラオス、タイへと西北部の山の道を通って南下してきたものである。又、彼らはタイ国での歴史も古く、100年位以前から住み始めたといわれている。国立民族学博物館の君島(1981)によれば、メオ族の歌に「中国の河は東に向かって流れているのに我々は日没の方向(西の方向)に移動して行く」という句が残されているという。

このような流れに乗って移動してきたメオ族の、タイ国における生活と民族服飾に関する詳しい研究は少ないのでそれについて報告する。

研究方法

本研究は1980年12月下旬、タイ国チェンマイ地方に赴き調査を行い、そこで得た資料を中心にメオ族の生活と民族服飾について解析を行ったものである。現地調査を行った12月下旬は、タイ国では乾期に当たり気候的には調査に最も条件の良い時期であった。チェンマイ地方は海拔335mの高原に位置し、乾期の平均気温は21℃であり、雨期では32℃である。訪れた時の朝の気温が16℃まで下がったことが一つの話題になったが、メオ族の中には彼ら特有の衣裳の上に、町から入手したと思われるセーターを羽織っているのが目立った。

調査対象とした所は、チェンマイ大学内の山岳民族研究センター及び、標高1,677mのドイステープ山に向かって登るプラタート・ドイ・ステープ寺院の奥にある青メオ族の村と、そこから車で40分程の距離にある白メオ族の村であった。ここへはタイ鈴木モーター株式会社のチャチャイ氏とカネー女史の2名のタイ人が案内に当たってくれた。この人たちの通訳により現地のメオ族について聞き取りと観察を行い、そこで得た資料をもとに、国立民族学博物館及びカノミタカコ氏より得た資料並びに末尾の文献により、メオ族の生活と民族服飾について

解析し考察を行った。

結果及び考察

I 生活と習俗

1. メオ族の由来と分布

タイ国は13世紀の中頃雲南に大きな勢力をもった一大部族王国がその後、この国の人口構成の主体をなすタイ族の南下によって現在の所に形成された国家である。菊池（1979）によれば、18世紀頃から中国の山地少数民族のうち、華南や西南シナに分布していた土着民族が徐々に南下して、インドシナ半島まで移動してきて、そこに住みついたものが多い。これらのうち、メオ族はタイ国山地民族の中でもケシの栽培で有名な種族であり、中国揚子江の南部に原郷をもち、貴州省を中心に華南・西南中国に分布していたが、Young（1969）によれば100年程前からベトナム、ラオス、及びタイ国の山岳地帯に移動してきて住みついたものようである。又、彼らは早くから漢民族の影響を受け、その伝統文化の中には中国の文化的要素が見られる。特に中国とは近縁関係にあるといわれるが、一面では日本の文化の流れともかかわりがあるのではないかという説もある。この種族はかつて漢民族に反抗し、だんだんと追いやられ貴州省・広西省から雲南省・インドシナ北部へと南下移動してきたものであるが、彼らには国境はなく、現在でも国境を越えて移動している。タイ国では、メオ族は北部タイを中心とし、チェンマイ、チェンライ、ターク、ペチャブーン、カンペンペト、ロエイなどの各地にその多くが住み、今日では図1に示すようなバンコクの北方300km位まで住みついている。

メオ族という名は主として、タイ族の間で用いられている呼称で、一般には古くからミヤオ族と呼ばれてきた。この呼び名の由来は、伝承では彼らは水田耕作を行っていたため漢族から「苗」つまり「ミヤオ」と呼ばれたが、それが地域的ななまりで「メオ」になったといわれている。その後、これは支配者に不服従な野蛮人という意味になったといわれ、彼らはこの名を用いることをきらっている。ゆえに彼ら自身は「フモン族」あるいは「モン族」と呼んでいる。すなわち、モンとは「自由な人」の意味である。

Young（1969）によればタイ国の山地民族はタイ人口の約10%を占め、その数は約25万人とされている。メオ族には、白メオ族・青メオ族・黒メオ族・紅メオ族・花メオ族などの5つの部族があるが、タイ国には青メオ

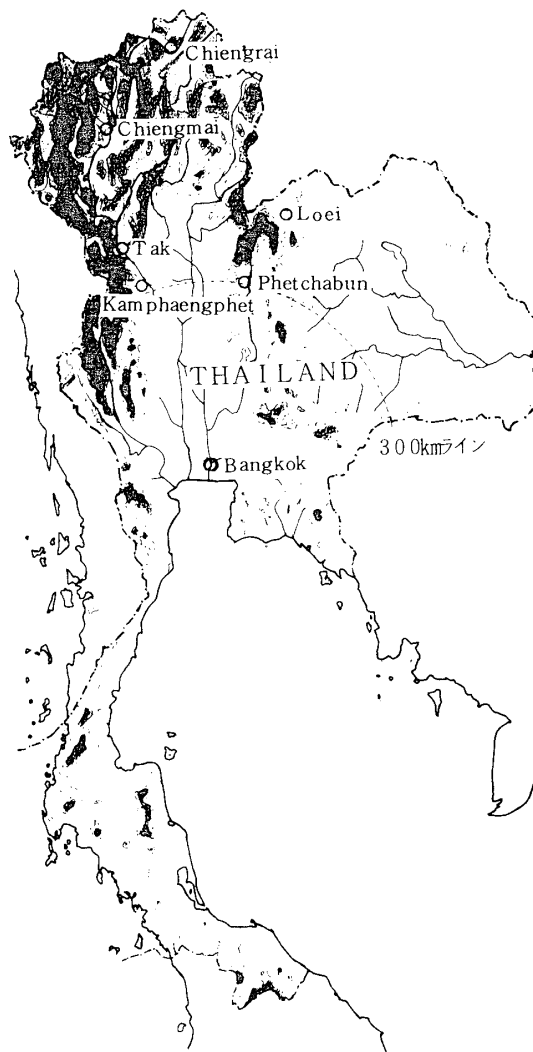


図1 タイ国におけるメオ族の分布

族 57.6 %，白メオ族 41.9 %，その他が 0.5 % の割合で分布し，青メオ族と白メオ族が主である。しかし，これは衣服の色の違いにより外国人が任意につけた名前にすぎなく，生活習俗などについては特別の違いは認められない。

2. 生活を取りまく環境

メオ族など山地民族の生業形態を特徴づけているものは焼畑農耕であるが，部分的には狩猟や採集のような自然経済に依存するところもある。焼畑耕作は山林を焼いて耕地にするため 2～3 年で耕地は荒れてしまい作物は出来にくくなるため，彼らは次々と肥沃な土地を求めて移動をしながら生活を続けている。まず，常緑樹が多く，岩などの少ない，肥沃な土地を選びそこに部落を造り，土地がやせると周辺の山を焼き払って新しい耕地を開拓し，そこに通う。その場所が次第に遠くなると，出小屋を設けて耕作を営み，その出小屋を中心に新しい部落造りを行い，次々と移動して行くという生活を行っている。従って，5～10年で移動するのは全体の92%にも及んでいるという。しかし，最近では，その肥沃な土地にも限度があり再び元の所にもどって来るといふ移動の仕方を繰り返しているものが多い。又，もう一つの移動の大きな理由は，村に天然痘などの疫病が流行する場合である。このような理由によりメオ族は，他の種族に比べて移動の激しいのも特徴の一つである。

3. 衣生活

メオ族の衣生活には，特に夏冬の区別はなく，日常着・外出着・儀式用といった区別も基本的にはない。従って，寝る時も病気の時も丹精こめて作ったそのままの衣服を着用している。又，彼らの生活には，T(時)・P(場所)・O(目的)がはっきりしていないのも特色の一つである。彼らの衣服には老若・既婚・未婚の区別も基本的にはない。従って種族を見分けるには先にも触れたが，服装によるのが最も容易で，その特徴は装飾的な刺しゅうと形態による所が大きい。これらのことから，メオ族の服飾の特色は細かいプリーツ・スカートとクロス・ステッチ，パッチ・ワークの刺しゅうであるが，ここでは衣生活の概要について述べるにとどめ，詳細については服飾の項において述べる。

4. 食生活

メオ族の食生活は主として米食であるが，馬鈴薯や玉葱などの野菜も栽培し，これも主食の一部としている。生計は焼畑農耕とケン栽培であり，自給自足の農業生活を営んでいる。又，この種族は黄金の三角地帯といわれるケン栽培の中心的存在として有名であることは前述の通りである。従って，アヘンを飲用するものも多く，その中毒患者は高齢者になる程多い。その他，彼らの食生活の一つに，儀式にはとうもろこしから造った酒を飲み，正月には豚や鶏のいけにえを精霊にささげ，その肉は正月中家族で食べる。しかし，新年のごちそうには野菜は食べない。それはこれを食すると後に貧乏となり塩と野菜しか食べられなくなるというように信じられているからである。

5. 住生活

メオ族の部落は小村集落であり，小さい村は2～3軒，大きい村で30軒位からなっている。タイ国の



図2 メオ族の住居

メオ族は20軒位が構成の平均的部落のようである。又、部落を造る条件として、焼畑耕作が出来、しかも水の流れが近くにあつて、ゆるい斜面のある所を選び、そこに村を造る。このため生活をするのに適当なスペースから決められることが多いと考えられる。又、一つの村の全世帯が同じ系族であり、系族の長老がその村の村長である。彼らの住居は図2に示すような平土間式の木造建築であり、地面に直接建てるのであるが、湿気とねずみを防ぐため貯蔵庫は高床式となっている。

住まいには古くは10人以上もの大家族が住んでいたが、文明の風が入りだしてからは次第に小家族となり、現在では平均6～7人が住み、広さは30畳程度である。彼らは常に移動する生活を繰り返しているため、家は板を並べただけの粗末なもので窓もなく、日中でも薄暗い。従つて、糸を紡いだりするような手仕事は戸外で行うのが常である。又、家屋の材料である木材はラワン（フタバガキ科）やチーク（クマツヅラ科）材が用いられ、屋根はフタバガキ科の大きな葉で葺いてある。

6. 習 俗

(1) 宗 教

メオ族は南の文化と北の文化を取り入れた民族であるといわれているが、中でも中国の影響を物質文化の面だけでなく、信仰の面においても強く受けている。すなわち中国的宗教習慣を持った原始宗教信仰者である。しかし、家に祭つてある神々の中には、富の神・薬の神・そのほか出入口の守護神や寝所の神・中央の柱の神・かまどの神などメオ族独自の神々もある。又、メオ族の種祖神は「槃瓠」と称する靈犬であるといわれているが、基本的には精霊（アニミズム）崇拝である。このアニミズムの宗教儀礼に伴う行事ないし、焼畑耕作民に共通した信仰や、山地に住む人たちの山に対する信仰は他種族とも共通したものがある。この固有の土着宗教は中国の道教的な儀礼と融合しているものと見ることが出来る。

(2) 社会的習慣

メオ族は石井（1979）によれば、社会集会を必要とする種族であり、村の取り決めはすべて村の長老の合議により決められる。

又、彼らの結婚観は、結婚は男女の結びつき以前に霊の結合であるという思想が強く、特に徹底した同姓不婚である。従つて、同姓同士は血がつながっていると考え、たとえお互い好きになつても初めから兄妹のように考え、恋愛の対象者としては考えない。更に異種族との結婚はほとんど認められないが、買子による間接的結婚は行われている。又、メオ族は日本的にいう農村的な性格が強く、血縁的つながりを非常に重視する種族である。彼らの命名法は親の名前の一字が後につく父子連名制命名法であり、これをたどつて行くと200年位前までさかのぼることが出来るといわれる。

メオ族の生活の中にも新年の祭りがあり、年末に家長が家の外で祈禱^{とう}を行い、豚や鶏をいけにえにして祖先の霊にささげ、新年の間中家族で食べる。彼らは新年を年のあらたまり、村のあらたまり、人間のあらたまりと共に靈魂を喜ばず神聖な行事として盛大に祝う。新年には衣服を新調し、木を彫つて作ったこまで、当てごまや、こま回しをしたり、羽根つきなどをして楽しく遊ぶ。

7. そ の 他

メオ族の個性については、顔は中国人によく似ており、体つきも頑健である。特に男性は背が高く、平均168cm位であり、たくましい体格をしている。これに対し、女性は健康でたくましいが背のあまり高くはない人が多い。そして全般に引込み思案で外部からの訪問者などがあ

ると家の中にかくれてしまう傾向がある。このほか葬式・結婚式・祭りなどの行事には多量のとうもろこしの酒が飲まれるが、男性は酔うと大声で騒ぎ陽気になるのに対し、女性は静かで控え目であるという一面をもっている。

II 民族服飾

山地民族を区別するのに最も容易な方法は、白鳥（1978）も述べているように服装と髪形である。山地民族のどの種族もそうであるが、男性に比べ女性にその特色が強く認められる。このことはメオ族も同様である。女性の場合、細かいプリーツのろうけつ染めのスカートにその特徴があるが、他種族ではアカ族にそのプリーツの技法がある。それは黒あるいは濃紺の無地で裾幅はメオ族よりも狭い。しかし、これは青メオ族の場合であって、白メオ族は又異なり、白のプリーツ・スカートである。以下青メオ族と白メオ族の服飾の特色について述べることにする。

1. 青メオ族の場合

(1) 男性の服飾

彼らの上衣は白メオ族のそれより丈が長く（腰丈より10cm程下）、図3に示すような打合がアンバランスな左前で、その打合端には線的に刺しゅうが施されている。下衣は韓国のパチのような股上の深いルーズなズボンをはき、腰にはベルトを締め、藍染めの布に細かいクロス・ステッチの刺しゅうを行った前垂れをするか、刺しゅうを施した幅広の帯を締め、これを前に垂らしている。その色は濃紺か黒で、自家栽培の麻などを材料にして織ったものであるが、サテン風のつやのある布で出来たものを着用することもある。頭には腕をふせたような丸い半円球型の、てっぺんに赤のボンボンのついた帽子をかぶっていることが多い。一般に装飾は日常の場合あまりつけていないが、祭りなどには首



図3 青メオ族の服飾

飾り・腕輪などに銀のものを装飾として用いる。

(2) 女性の服飾

女性の服飾は前述のごとく、その特色が極めて顕著である。すなわち色彩は山地民族に多く見られる濃紺か黒であるが、上衣は図3に示すような垂領風の左前の打合わせで、後衿ぐりのみに両下端のつながったフラットな衿が付いたものである。更に打合いや衿には、手の込んだ刺しゅう

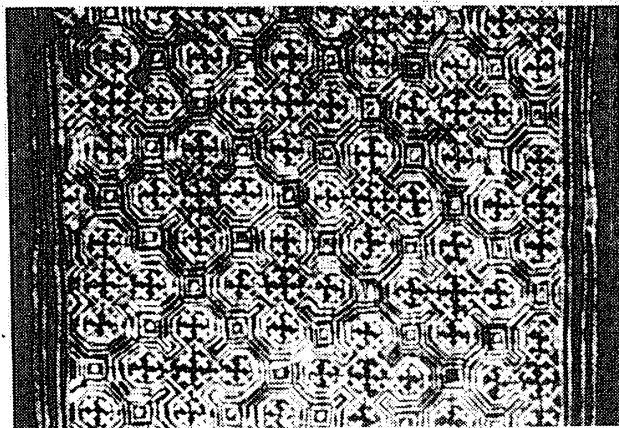


図4 青メオ族の図案

うやパッチ・ワークの技法で手芸的にみごとに装飾されている。

スカートは現地で入手したものであるが、スカート丈は50cm程のミニ・スカートで3段に切り替えられており、上部(A)は黒の無地、中段(B)は28cm程の幅で全体に図4に示すようなメオの星と称する図案を藍染めのろうけつにしたものである。又、下部(C)は14cmの幅の布であるが、その布が最も糸密度の粗い南京木綿に似た生地である。全体に極細毛糸のクロス・ステッチで、色彩は(7.5YG $\frac{7}{10}$ ・7.5R $\frac{4}{14}$ ・10RP $\frac{5}{14}$)の色で細かい刺しゅうが施されている。その上に3.8×4.8cm角の白の布を土台にして、それぞれ2色ずつの配色で[(5R $\frac{4}{14}$ ・2.5G $\frac{5}{10}$), (N1・5R $\frac{4}{14}$), (10B $\frac{4}{10}$ ・6RP $\frac{5}{8}$), (10GY・6RP $\frac{5}{8}$), (10B $\frac{4}{10}$ ・3YR $\frac{5}{8}$)]パッチ・ワークしたものをアップリケしたり、テープ状の布(5R $\frac{4}{14}$)をのせたりしている。又、刺しゅうの配色やパッチ・ワークなどの構図は多種多様で、それぞれ特有のものである。スカートについては図5の通りである。この細かいクロス・ステッチを刺すのに下絵を描くことはほとんど行わず、刺しながら美しい図柄を作っているが、その方法は完成した時の表面の美しさを考えてなのか裏刺しの方法をとっているのも一つの特色である。スカート地は図5の表に示すようなAの部分は糸密度(本/cm)タテ24.3・ヨコ19.3,厚さ0.40mm, Bの部は糸密度タテ18.3・ヨコ14.7,厚さ0.52mm, Cの部分はタテ10.3・ヨコ11.0,厚さ0.91mmの厚めの布で、しかも刺しゅうを施したりして更になくなった布を1cm程度の細かいプリーツにたたんでいるが、これも手尺で寸法を計りひだ数は310本、裾幅665cm,重さは1.09kgと相当の量である。仕立て方はそのプリーツのひだ崩れを防ぐためであるのか、あるいは腰のあたりをすっきり見せるためであろうか、ウェスト位置よりも3cm程下がった所に0.8cm幅のテープが上からのせて押さえてある。彼女たちはこのスカートをはいたままで農作業に従事し、又、これを休養着にも用いている。これらの布は通常自家栽培で得た材料で糸を紡ぎ、手機でそれを織り、且つ染め、仕立てるのであるが、これはすべて女性の仕事である。そしてこれを仕立てるだけに5~6ヶ月を要するといわれる。又、彼女たちは腰にも細かいクロス・ステッチの刺しゅうを施した幅広の帯を結んで後に下げており、その上から細長い前垂れをしている。更に足には脚絆をつけ、頭には額の部分を広く剃り、髪は束ねて頭上でくし巻き風にまげを結び、その根元に布を巻いたり、或いはターバン風に巻いたりしている。祭りなどの行事には刺しゅうを施したターバンを筒型に巻き頭髪をかくすようなかぶり方をするのも一つの特色である。一般にメオ族は装飾に銀製のものを用いるのを好み、日常の仕事をする時にも銀の装飾をつけていることが多いが、祭りなどには全財産をつけるという程多く身につける習慣がある。特に手の込んだ優れた技術を持った娘が良い女性とされるので、祖先から受け継がれてきたこの技術が親から子へと歳月をかけて伝承されている。

2. 白メオ族の場合

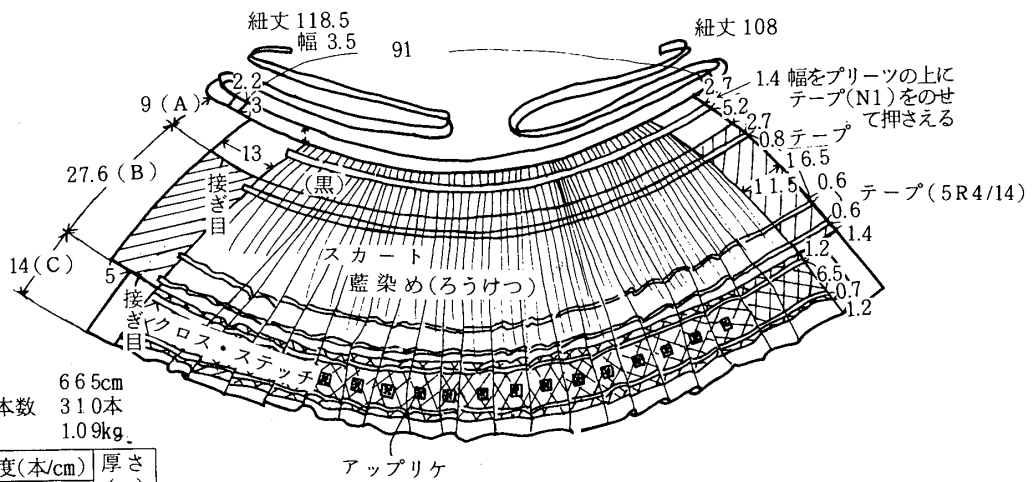
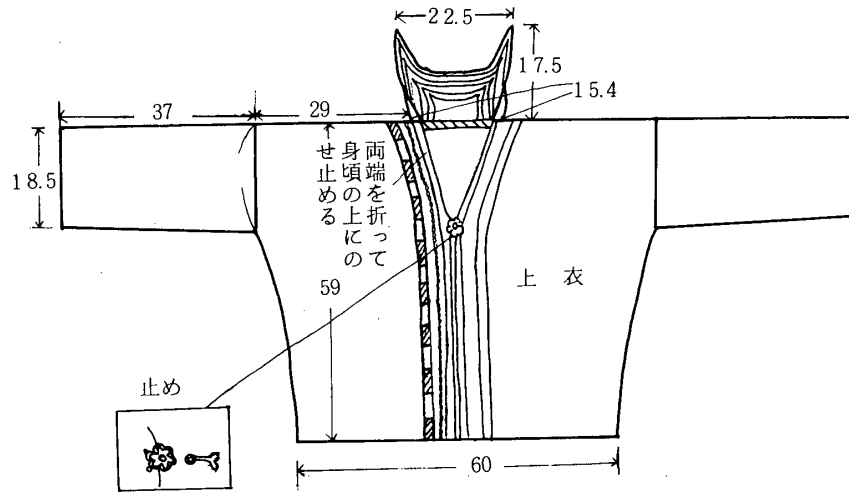
(1) 男性の服飾

白メオ族の男性の衣服は、青メオ族に比べ丈の短い上衣が用いられ、刺しゅうなどもあまり施されていないが、韓国の下衣のパチのようなルーズなズボンをはく。青メオ族との違いは上衣丈が違う程度で、型はよく似ている。しかし梅棹(1978)によればバンドカラーの上衣を着ている者もある。日常は銀製の太い首飾りをしているが、祭りなどの行事では、それが更に多くなるのが目立つ。この点については青メオ族よりも白メオ族の方が装飾は多い傾向が見られる。

(2) 女性の服飾

女性の上衣は青メオ族のものと同じような型であるが、後衿ぐりに付いている衿は四角でやや小さめである。下衣は通常濃紺のズボンをはき、青メオ族と同様に帯を締め前垂れをする。

頭部につけるものも青メオ族とほとんど同じである。しかし、白メオ族はこのズボンの代わ



裾幅 665cm
プリーツ本数 310本
重量 1.09kg

	密度(本/cm)		厚さ (mm)
	タテ	ヨコ	
A	24.3	19.3	0.40
B	18.3	14.7	0.52
C	10.3	11.0	0.91

(C)の部分

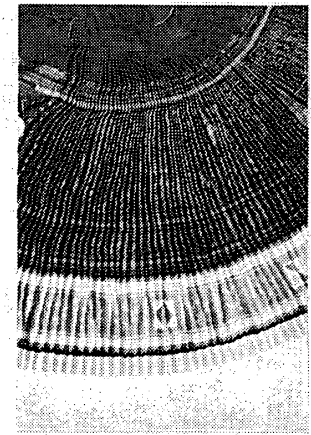
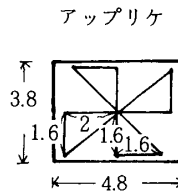
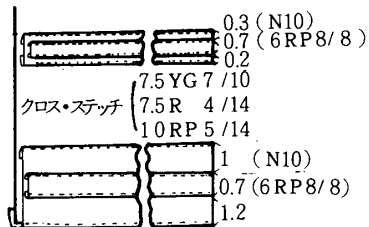


図5 青メオ族の女性の衣服 (単位cm)

りに、時には青メオ族のものに似た細かいプリーツであるが、白のスカートをはく、その時には脚絆を着用する。装飾も銀製品のを好むが、青メオ族に比べ白メオ族の方が首飾りは比較的首にぴったりとくっつき、前の方が後より太くなった感じのデザインのを好んで用いる。

3. 染めと織り

衣服を作る布は通常自家栽培の大麻を用いる。それは茎を4本位に裂き、枯らしてから、それをよりながらつなぎ合わせて糸にするが、その紡いだ糸を35cm位の幅に手織りでこれを天然染料で染める。

染料は、ほとんど天然染料を用いるが茶色にはクラダック（フタバガキ科）の茎で、その皮では黒色を染める。緑色には染料に南洋柿を用い、それを更に何度も繰り返して染めると黒色になる。又、濃紺の場合は藍で染める。又、カノミタカコ氏の調査では赤色は豚の血を用いて染めているということである。更に、ろうけつ染めには蜜蝋を用い、あまり亀裂を入れないのがメオ族のろうけつ染めの手法である。しかし、最近では町からパラフィンを手に入れ、これを用いることも年々多くなる傾向が見られる。

以上メオ族の民族服について、青メオ族と白メオ族とを比較しながら考察を行ったが、彼らの生活や民族服もケシ栽培の禁止による新しい副業の奨励、山中の部落に小学校を建て一般タイ人と同様の教育を行うなどタイ政府の政策により、平地民との交流が急激に進んでいる。従って、特色ある民族服も母から子へと長い歳月をかけて傳承されてきた自給自足の方式が次第に簡易な方法に移り変わっていくのではないかと思われる。

摘 要

東南アジアの大陸部には伝統文化を異にする幾種類もの少数民族が入り交って分布しているが、これらのうちケシ栽培で知られ、少数民族の中でも多数の人口を占めるメオ族の、タイ国における生活と民族服について調査研究を行い、彼らの生活習俗において次の諸点を把握することが出来た。

1. タイ国でのメオ族は、チェンマイ、チェンライ、ターク、カンペンペト、ロエイ、ペチャブーンの北部を中心に分布している。その由来については、「メオ」とはタイ人がつけた呼び名である。彼らは本来は水田耕作を行う種族で「苗」つまり「ミヤオ」と呼ばれていたが、それがなまってメオとなり、支配者に不服従な野蛮人という意味に解されるようになった。しかし、彼ら自身は「自由な人」という意味の「フモン」あるいは「モン」といっている。
2. 彼らの衣生活は、夏冬、日常着、外出着、儀式用といった区別が基本的にはない。現在タイ国には青メオ族が約58%、白メオ族が約42%の割合で住んでいるが、これは主に衣服の色の違いによって区別されたものであり、青メオ族の女性は、ろうけつ染めのプリーツ・スカート、白メオ族は白のプリーツ・スカートにその特色が見られる。
3. 食生活は米と野菜が主食であるが、正月には精霊に豚や鶏のいけにえをささげ、それを食する。しかし、この間野菜は食べない。
4. 部落の構成は小村集落であり、20軒位が平均的部落の規模である。又、一戸当たりの住人は6～7人が標準となっている。家屋は平土間式であるが、貯蔵庫は湿気とねずみの浸入を防ぐため高床式となっている。
5. メオ族は宗教としてアニミズムを信仰し、種祖神は「槃瓠」と称する靈犬であり、精霊には豚や鶏のいけにえをささげる習慣がある。

6. メオ族の結婚は、男女の結びつき以前に霊の結合という思想が強く、徹底した同姓不婚である。
7. 民族服は彼らの仲間意識を強調するものであり、特に女子の衣服や装身具には種族固有の色彩感覚や、デザイン思想が山地民族の生活と調和して着用されている。しかし、衣服本来の機能との関係については今後の課題であると考えられる。
8. 近年ではタイ政府の政策により、小学校の建設、政府指導の産業の奨励などにより、山地民族特有の生活も平地化されてしまう日もそう遠くはないのではないと思われる。

最後に本研究を行うに当たり、終始懇切な御指導を賜った岐阜大学教授中野刀子先生、御助言及び御校閲をいただいた名古屋女子大学教授栃原きみえ先生、又、資料の提供を下された国立民族学博物館並びに現地調査に当たり格別の御協力をいただいた鈴木自動車工業株式会社社長鈴木修氏をはじめ、タイ鈴木モーター株式会社のチャチャイ、カネーの両氏に対し深く感謝の意を表する次第である。

文 献

- 1) 岩田慶治：東南アジアの少数民族，日本放送出版協会（1971）
- 2) 梅棹忠夫：民族探検の旅 第2集，学習研究社（1978）
- 3) 石井米雄：世界の民族 11，平凡社（1979）
- 4) 白鳥芳郎：東南アジア山地民族誌，講談社（1978）
- 5) 講談社編集部：世界の国・東南アジア I，講談社（1975）
- 6) 菊地一雅：ケンをつくる人々，三省堂（1979）
- 7) G. Young：The Hill Tribes of Northern Thailand, (1969)
- 8) 村松一弥：中国の少数民族，毎日新聞社（1973）
- 9) 綾部恒雄：タイ族，弘文堂（1971）
- 10) 岩田慶治：東南アジアのこころ，アジア経済研究所（1980）
- 11) 木内信蔵監修：目でみる世界の国 164 東南アジア，66～91，TBSブルタニカ（1980）
- 12) 白鳥芳郎：季刊民族学 4，97～103，民族学振興会（1978）
- 13) カノミタカコ：染織と生活 25，(染織と生活社 106～110, (1980)
- 14) 水治富雄他：グラント世界大地図，人文社（1979）
- 15) 柴村恵子他：名古屋女子大学紀要 27, (第1報) 1～14, (1981))
- 16) 柴村恵子他：名古屋女子大学紀要 27, (第2報) 15～24, (1981)